

■ 第91回調査研究方法検討会かわら版 ■

去る 2025 年 3 月 16 日 (日)、TKP 品川カンファレンスセンターとオンライン会議システム Zoom のハイブリッドにて、第 91 回調査研究方法検討会が開催されました。

検討会の報告要旨は、各演者の方へお願いしております。ご発表いただいた研究の概要とともに、検討会で議論された内容も含めご報告いたします。

「三観地区小児生活習慣病予防健診のまとめと、他地域とのデータ比較」

尾崎貴視

2012 年以降、三豊市および観音寺市（以後、三観）では小学校 4 年生を対象とした小児生活習慣病予防健診を実施している。三観では三豊・観音寺市医師会と行政が連携して独自のアンケートを用い、両者の提携のもと、保護者から了承をえることのできた香川県と地域独自のアンケートおよび血液データを使用し公衆衛生に資する目的で解析を行ってきた。

この度は、耐糖能異常の予測、脂質異常の程度の予測について、健診から得られるデータを利用し、これらを評価する適切なマーカーを模索する方法およびその倫理的な問題について、調査方法検討会へ相談した。そのマーカーとしては空腹時採血と非空腹時採血による差がどのように表れるのかも検討したいと考えた。

ここでいただいたアドバイスとして、まずは、目的が明確でないため、更に具体的な目的に絞って計画するべきとのこと。これについては、検討の中で、健診にて得られたデータより小児メタボリック症候群と相関するマーカー（例えば、TG/HDL-C など）を探索する方向で検討しては、ということを示唆いただいた。

一方、そもそも小児メタボリック症候群の診断は三観において診断可能である。明らかに診断されているものに対して、マーカーを探索する意義はあるのか、とのご意見をいただいた。

それにつては、同様の因子に、成人のメタボリック症候群のマーカーとしては有効なものもあり、今後、成人への移行医療として評価できるどうか、検討してはどうかということであった。

また、三観は空腹時採血を行っているためメタボリック症候群の診断が可能であるが、非空腹時採血を行っている地域においては正確性に欠ける。空腹時採血を行っている当地と、非空腹時採血を行っている県内他地域との共同研究により、三観で有効とされるマーカーが非空腹時採血を行っている地域においても可能かどうかにつき、検討できればと考えている。

なお、健診への勧奨や、アンケートおよび採血結果を当医師会へ提出することに関する同意書の取得等は教育委員会が行っており、医師会へは個人情報に配慮した形でデータのみが引き渡される。そのため、倫理的問題については、特に問題ないとのことであった。

これら、いただいたご意見を元に、研究の目的や方法につき更に検討してゆく予定である。

「2024 年度に流行した小児マイコプラズマ感染症外来診断の再検討」

村瀬真紀

2024 年度の 1 年間に流行した小児マイコプラズマ感染症をまとめ、外来臨床像と診断の再検討を試みました。2024 年 4 月から 2025 年 2 月までに当院でマイコプラズマ疑いで検査を施行したのは 200 人であり、うちマイコプラズマ陽性と診断したのは 150 人、陰性と診断したのは 50 人、この 2 群で臨床像、診断、治療を比較検討する予定です。検討会ではまず陰性群について、マイコプラズマ抗原診断は感度が低いため、陰性なのか検出できていないのか判断できず、Control としては相応しくないとのこと指摘をいただき、さらに治療についてマクロライド耐性株の診断ができていないことも指摘されました。一方で、従来からの疾患であるけれども、新にまとめてデータを提示する意義はあるとのこと意見もいただきました。

「小児科クリニックにおける新型コロナウイルス感染症診断の検討～発熱基準値を中心に」

村瀬真紀

2022 年 1 月～3 月にむらせ赤ちゃんこどもクリニックに受診し、新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の検査を施行した 404 人を、COVID-19 確定 164 人、非確定 240 人に分け、発熱のカットオフポイント、確定のリスク因子の検討を計画しました。検査対象は検査拒否者を除く、すべての何らかの風邪症状を有する児（人）、あるいは検査希望者でした。検討会では、対象の年齢層（成人が含まれている点など）、選別方法などの問題点を主に指摘していただき、さらに現在すでに研究期間から 3 年経っていることの問題点も話されましたが、一方でたとえ流行が過ぎた時点であっても、今後の感染症対策のためにこのような検討結果を形として残しておく意義があるとのこと意見もいただきました。

「インフルエンザウイルスの家庭内感染に対する麻黄湯予防投薬の有効性に関する研究」

中山裕介

インフルエンザは毎年流行し、日本国内で約 1000 万人程度が罹患し、家庭内での二次感染率は 20～50%程度とされている。小児がインフルエンザに罹患した場合にはインフルエンザ脳症や気管支炎などの合併症を起こすことも多い。予防策としてワクチン接種があるが、感染予防効果は限定的であり、既存の予防投薬（オセルタミビルなど）は自費診療となるため高額であり、全員に使用するのには負担が大きい。

そこで、初発発症者以外の小児を対象として麻黄湯を予防投薬として投与した場合に二次感染を抑制することができるかを検証する。

【議論の内容】

麻黄湯の適応外使用となるため通常の臨床研究ではなく、特定臨床研究となり、治験と同等の体制を整える必要があるためこのまま研究を実施することは難しい。まずはインフルエンザ発症者に投与することで、二次感染が減るかどうかを調査してみてもどうか。またその家庭内感染の調査に関しては調査研究方法検討会の委員でもある幸道先生が過去に実施したインフルエンザの家庭内感染調査の報告を基に組み立ててみるかどうか。

「小児期慢性機能性便秘児の直腸径の検討」

富本和彦

小児期慢性機能性便秘症の管理において腹部超音波断層像の意義は明確ではない。直腸は固形の臓器ではないためその径は貯留内容に大きく影響される。さらに貯留内容は「最終排便からの時間」、「体格（年齢）」、「便性」、「直腸壁のコンプライアンス」の影響を受ける。

直腸径を慢性便秘の診療指標とする上で、「どの条件で計測された直腸径が定常状態を反映するか」が問題となる。先行研究では直腸壁のコンプライアンスは罹病期間と便性に関連していることが示されている。また、PEG 導入後は便性コントロールが良好となり、便性による差は少なくなった。罹病期間と年齢の条件は刻々と変化するものではないため、現時点で直腸径に最も強く影響するのは「最終排便からの時間」と考えられる。この検討のために、今回当院診療録の慢性便秘児の直腸径データからその調査を行う。

対象は過去 5 年間に当院で管理した慢性機能性便秘の児とし、その診療データから目的変数を「直腸径」として重回帰分析を行い、直腸径に関連する因子を抽出する。有意に関連したのが「最終排便からの時間」だったとすれば、直腸径の最低値を基準として X 軸に「最終排便からの時間」、Y 軸に直腸径（最低値を基準(100)として、それとの比率(%)で表示する)をプロットし、Restricted cubic spline 関数曲線を描く。この曲線において直腸径が一定に達する点の X 軸値を検討する。

検討会の議論では最終排便時の便量が少なかった時の影響、神経発達症など排便を大量にため込んでいる影響についても検討すべきとした意見が出された。

「開業小児科医が外来で遭遇する重要疾患の経験数調査（第 3 期）」

中村豊

近畿外来小児科学研究グループでは、2002 年 1 月からの 2 年間、外来診療で見逃してはいけない重要疾患の頻度を調査した。2013 年 1 月からは第 2 期として同様の調査を行ったところ、細菌性髄

膜炎はなくなり、川崎病は増加していることが判明し、2回の調査結果をまとめて「外来小児科」に発表した。第2期の調査から10年以上が経過し、新型コロナの流行も落ち着きを見せているところで、第3期として同様の調査をすることは、小児科外来診療の現状を知るとともに「見逃してはいけない疾患」を再認知する場ともなると考える。

第2期では12疾患について検討したが、今回はさらに4疾患（1型糖尿病、ネフローゼ症候群、溶連菌後急性糸球体腎炎、急性陰嚢症）を加えることを考えている。外来で診察をして診断に至らないまでも、紹介することで正しい診断への道筋をつけることができた症例のみを対象とすることとした。多くの施設の参加を希望する。

連絡先：〒820-0040 福岡県飯塚市吉原町 537 いいづかこども診療所 牟田広実
FAX: 0948-80-5632, E-mail: qze05346@nifty.com